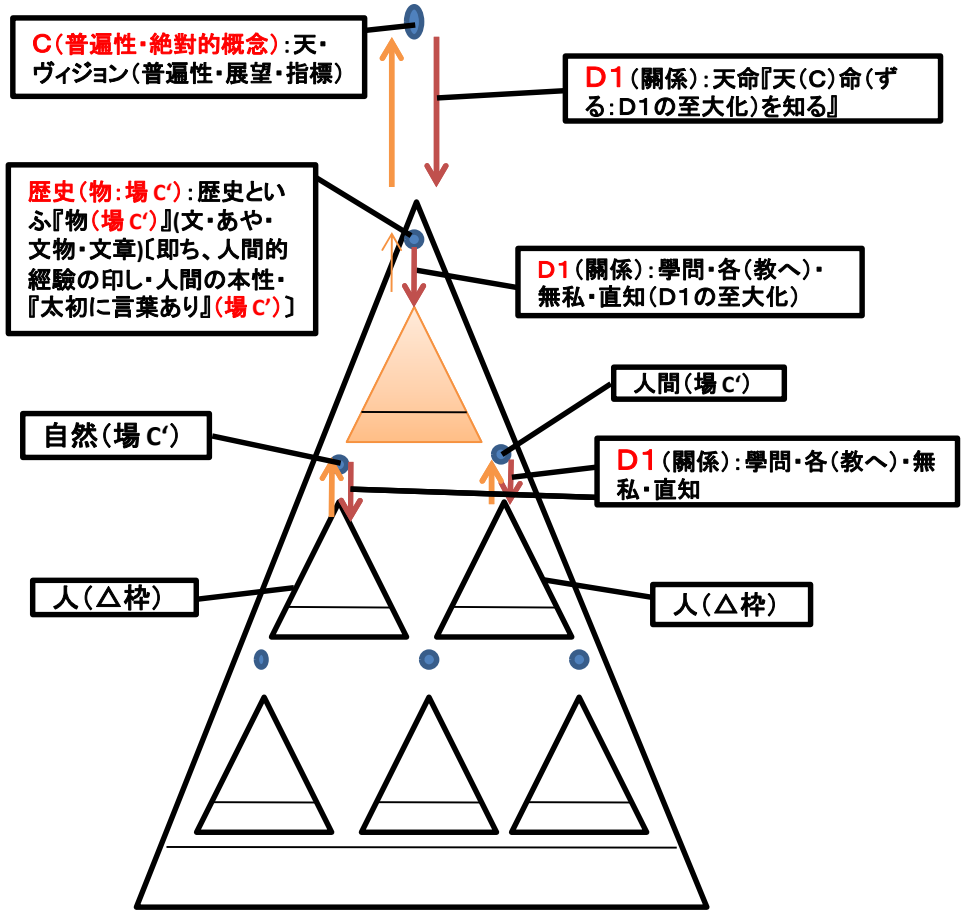
《難解 小林秀雄には 恒存の關係論が最適》

評論 『#物』 (『考へるヒントⅡ』)
徂徠:『學問は歴史(物:場 C‘)に極まり候』『#学問の道は文章(物:場 C’)の外無レ之候』。

＊歴史といふ『物』(場 C‘:文・あや・文物・文章)〔即ち、人間的經驗の印し・人間の本性・『太初に言葉あり』〕⇒からの關係:學問・各(教へ)・無私・直知⇒朱子學(心は教への條件)を否定。
＊仁齋の心法「思つて得る・訓詁註釋(學んで知る)の否定」をも更に否定。
即ち、「『思はずして得る、勉めずして中(あた)る』になる、これを疑ふな、と徂徠は説く」。
＊普遍性(C:天・ヴィジョン)⇒天命(D1の至大化)⇒『歴史像(物:場 C‘)⇒からの關係:各(教へ)・直知・無私(D1の至大化)即ち學問(D1の至大化)の客觀性⇒徂徠』。



評論『物』(『考へるヒントⅡ』)
P262「彼が、『學問の道(D1の至大化)は文章(＝歴史:場 C‘:言と同？)の外無レ之候』と言つてゐるのは、もし學問(D1の至大化)が歴史(場 C‘)に極まるなら、人間(場 C‘)的經驗(D1の至大化)の印し(場 C‘)を求めて行けば、文章(場 C‘)といふ意識(D1の至大化)的な表現に極まる(D1の至大化)といふ意味であらう」〔とはつまり「(P256)歴史(場 C‘)とは、人間の本性(場 C‘)。これを別の言葉で言へば、『太初に言葉(場 C‘)あり』と言ふ事か」〕」。
P262『文』(場 C‘)は『あや』(場 C‘)であり、『あや』(場 C‘)に極まる」⇒「文(場 C‘)には必ず各人(各場 C‘)の、各時代(各場 C‘) の生活(場 C‘)經驗のスタイル(場 C‘)が現前してゐるのであり、この特殊な具體的(リアル)な『あや』〔即ち、具體的な・リアルな『生活(場 C‘)經驗のスタイル(場 C‘)』〕を直知(D1の至大化)するのが、歴史(場 C‘)を究明(D1の至大化)しようとする者(△枠)の先決事」。それ〔『あや』(具體的な・リアルな『生活(場 C‘)經驗のスタイル(場 C‘)の直知(D1の至大化)』〕が『格物』〔物(文・あや＝尤物:場 C‘)⇒格(D1の至大化)〕なのであり、『格物』の一番純粋な形は、物(文・あや＝尤物:場 C‘)の直知」⇒「直知(B的:D1の至大化)が體驗(A的:D1の至大化)に發展(B＋A)するのが、人間(△枠)に一番無理のない確實な知を致す道(D1の至大化)だ、と彼は考へた」。
P263「歴史(場 C‘)の『あや』(場 C‘)が、掛け代へのない個性(場 C‘)〔即ち『生活(場 C‘)經驗のスタイル(場 C‘)』〕を持つて生きてゐるのを捕へる(D1の至大化)爲には、この術〔B(直知)＋A(體驗)の:D1の至大化〕に頼む他はない」。
P264「無私(D1の至大化)な交はりに似た、歴史(場 C‘)といふ物(場 C‘)への没頭〔即ち『格物』:物(文・あや＝尤物:場 C‘)⇒格(D1の至大化)〕を言ふ【とはつまり、「我(△枠)と物(場 C‘)との直接の交渉〔『力むる(夾雑物:理E)を容れざる』〕が、知を致す(D1の至大化)基本的な道(D1の至大化)と言ふ事」】⇒「この經驗(D1の至大化)を通じなければ、過去(歴史:場 C‘)の人間事(場 C‘)が、蘇り(D1の至大化)、個性(場 C‘)ある像(心像:場 C‘)を今日(場 C‘)の心に結ぶ(D1の至大化)といふ事は、決してない」。
P264「徂徠の言ふ『文』(場 C‘)は文物(場 C‘)を指す」⇒「歴史(場 C‘)は『事物當行の理(E)』ではなく、文物(場 C‘)の『殊(特殊性:場 C‘)を以て相映ずる』生活(場 C‘)上の關聯であると彼は考へた」【参照:P262「歴史(場 C‘)の呈示する『あや』(場 C‘)〔即ち『生活(場 C‘)經驗のスタイル(場 C‘)』〕を見る事が極まれば、其處に自ずから『殊(特殊性:場 C‘)を以て相映ずる』といふ事が必ず起る」】」⇒「さういふ鮮明な歴史(場 C‘)の心像(場 C‘)を得た(D1の至大化)時に、歴史(場 C‘)といふ人間事(場 C‘)に關する人間(場 C‘)的判斷(D1の至大化)が可能となる」⇒「徂徠は、其處に現れた人間(場 C‘)の文物(場 C‘)を作り出さうとする努力(D1の至大化)の多様性〔即ち『殊(特殊性:場 C‘)を以て相映ずる』〕を、出來るだけ直接に鮮明に、感受(D1の至大化)しようとした」。
P264「もし、彼(△枠)の學問(D1の至大化)の客觀性(D1)を言ふなら、それは彼(△枠)の無私(D1の至大化)が描き出した歴史像(場 C‘)の普遍性(C)に、はつきりと基く〔つまり『普遍性(C)⇒歴史像(物:場 C‘)⇒無私(D1の至大化)即ち學問(D1の至大化)の客觀性(D1)⇒彼(徂徠)』〕と言ふ他はあるまい」。
P265「あらゆる歴史(物:場 C‘)的條件(D1の至大化)、歴史(物:場 C‘)的制約(D1の至小化)にもかかはらず、體驗(D1の至大化)によつて、具體的(リアル)な文物(物:場 C‘)を作り出し(D1の至大化)てゐる人間(物:場 C‘)の多様性〔即ち『殊(特殊性:場 C‘)を以て相映ずる』〕と充實とに關する、非常に鋭いヴィジョン(C: 普遍性・展望・指標)を抱き、これに固執(D1の至大化)し、彼は、そこ【つまり、『格物』〔物(文・あや＝尤物:場 C‘)⇒格(D1の至大化):『物(C‘場)とは教へ(D1)の條件なり』〕と解した體驗(D1の至大化)形式の極限(D1の至大化)に現れた抜き差しならぬ人間(物:場 C‘)の像】から、何も彼も引出し(D1の至大化)て見せた」。